

レポート 日台米親善コンサート「歌の架け橋」となって

●台湾

十一月十八日から台湾への三週間の旅が始まった。これは九月二十六日からスタートしていた復興応援コンサート「歌の架け橋」となっての一環である。国内の復興応援コンサートは友人のテノール大田翔くんを中核に据えて、それまでに熊本、愛媛の宇和島、宮城県の山元町、多賀城、雄勝、仙台、そして東京を廻っていた。その次の橋を台湾に架けるべく羽田より発ったのである。

台湾での活動を羅列すると、同日昼過ぎに台北の空港に到着。高鉄(新幹線)に乗って台南駅へ。台日友好交流協会の郭貞慧理事長と共に奇美博物館の郭玲玲副館長を訪ね、台湾の後に続く米国コンサートに向けてご支援をお願いする。奇美博物館は台湾財界の大立者、故許文龍氏の建設したもので、国立の博物館に匹敵するほど豪華な品々を収蔵する白亜の城である。次に台南市東区東聖里活動センターへ移動し、夜の七時より演劇ワークショップの一回目。一般募集の六名に加え、成功大学演劇科(京劇・台湾オペラ)の生徒たちも特別参加した。宿舎「南寧文学の家」に到着したのは零時近くであった。このワークショップは一週間続き、中国語による狂言「痺」(しびり)と、私の音楽劇作品「お琴」の中の現代狂言を、二十九日の発表会まで全員一丸となって練習した。

二十日の日中には成功大学に招かれ、私の講演会が開かれた。片言の中国語を交えながら話は進み、百二十人ほどの学生たちは時々笑いながら私の貧乏人生伝に聞き入った。「私のふるさととは地球である」と語った時、会場から大きな拍手が沸き起こったのを鮮明に覚えている。彼らと血が通い合ったと思えた瞬間であった。

二十五日から大山大輔くんが東京から助っ人に入り、成功大学のサークル棟で同大混声合唱団の学生たちと歌のワークショップも開始された。学生たちと練習後に夜市に行ったり、侃々諤々歌詞を中国語に置き換えたり、発表会を目指して熱烈な創作活動が続けられた。そしていよいよ二十九日の発表会。台中市から白衣(医師)のピアニスト林品安(リン・ピンアン)くんもかけつけ、台南市民有志と成功大学学生有志による「台南×仙台劇場交流計画プログラム」が**成功大学演奏庁にて幕を開けた。内容は、**

- 一、 狂言「痺」(しびり) 台南在住の若者たちによる狂言の中国語による上演
- 二、 林品安ピアノ独奏 滝廉太郎「憾」 ショパン「幻想曲」
- 三、 大山大輔バリトン独唱「荒城の月」「初恋」「さんさ時雨幻想」
- 四、 中国語による朗読と歌「最後の総督の残したもの」 朗読 大日琳太郎
- 五、 演奏会形式による「星空のコンチェルティーノお琴」

演奏は成功大学合唱団、大山大輔、林品安

このプログラムのプロデューサーは林信宏と言う成功大学の学生で、台南の歴史的英雄「鄭成功」に惚れこんでいるという点が私との共通項。二人で合力し、五年後にオペラ「鄭成功」を創作し、台湾、日本、米国で上演したいという野心をもっており、今回の台南市でのプログラムはその布石と言える。この発表会には他にも成功大学の文化コースの教授陣、台南市の文化担当のお歴々、台南市台日友好交流協会も参画し、仙台の姉妹都市台南市の面目躍如たる企画であった。

翌日の三十日は大山くんと品安くんと早起きをして、一昨年大きな地震に見舞われた花蓮市までクルマで七時間かけて移動。璞石珈琲館にて夜七時から三人によるチャリティーコンサートを開催し、台湾での最後の架け橋工事を終えた。

●米国

冷たい空気が張り詰め、白雪舞う中、日台米親善ファンドレイジング・コンサート「歌の架け橋」となって」は、二〇二〇年一月十八日、米国ニューヨークのマンハッタンにあるスカンジナビア・

ハウスに約百五十人の観客を集めて開催された。東日本大震災のとき「ともだち作戦」を執行して救いの手を差し伸べてくれた米国、物心両面において最大級の支援を寄せてくれた台湾、そして日本、この3か国を音楽で結びたいという私の呼びかけに、ニューヨークの非営利団体「CUPA (CATCH US PERFORMING ARTS)」が呼応し運営された企画であり、昨年九月からの一連の復興応援コンサートの千秋楽でもある。

日本から大山大輔くん（バリトン）、台湾からピンアン・リンくん（ピアノ）、米国からはキャロライン・ミラーさん（ソプラノ）三人の音楽家がニューヨークに集結し、美しい旋律を奏で、歌いあげてくれた。

2部構成で行われた同公演は、ソロ、デュエット、朗読などバリエーションに富んだ内容で、ピンアンくんは台湾民謡のピアノ変奏曲「草蜢弄雞公」、大山くんは滝廉太郎作曲の「荒城の月」、ミラーさんはブロードウェイ・ミュージカルから「Will he like me?」など、まず自国の楽曲を披露。その後に、ピンアンくんが日本語、大山くんが英語、ミラーさんが台湾語と、母国語ではない言語で歌うという演出が施され、タイトルである「歌の架け橋となって」を文字通り表現し観客席を沸かせた。また、宮城県民謡「さんさ時雨」に込められた哀しみを、チリ地震津波によって最愛の人を奪われた女性が六十年の余生を経て解き明かす物語「哀しき祝い唄」が英語で朗読されると、会場からはすすり泣きが漏れた。

●感謝感恩の心を忘れず

昨秋からの復興支援コンサートと文化交流は、日台米三か国から寄せられた寄付・協賛金によって運営され、それなくしては成立しないプログラムであった。剰余分は今後の海外との文化交流と、この秋からCUPAが導入する若手アーティスト奨学金プログラムにも活用されることになっている。日本国内からも多くのお力添えを頂いた。皆様からのご恩徳に心の中で手を合わせ、頭を垂れて感謝の意を表し、このレポートの結びとしたい。

ありがとうございました。

2020年2月3日

ふるさとの物語制作委員会
芸術監督 大日琳太郎

ニューヨークでのコンサートから



台湾国立成功大学合唱団と共に

